

Multimedia 時代と media 教育

森 田 彰

キーワード：メディア マルチメディアコンピュータ 文（章）語 口語
インタラクティビティ

言語の研究を2つの切り口から行う手法がある。Saussureによればその2つの切り口とは *langue* と *parole* であり、Chomskyによれば *competence* と *performance*⁽¹⁾である。この2者の違いは様々にあるが、*langue*, *competence* が抽象的で単一的であるべき反面、*parole*, *performance* は具体的で多様である。その具体的な *parole*, *performance* はメディアによって発現される⁽²⁾。従って、新しいメディアが言語世界に導入されれば、それが少なくとも、*parole*, *performance* に影響しないことはない。*langue*, *competence* から離れても、心理的に我々の言語活動に影響を与え得ることは、体験からも直感できよう⁽³⁾。

言語の用いるメディアが、*parole*, *performance* に影響している以上、そのメディアの特徴を認識させることは、言語学習にとって不可欠とも言える。ましてそれが、複合した姿で現れる *multimedia* が現実味を増している現在、広義、狭義のメディア⁽⁴⁾の特性と言語との関わりをより明確にして行くことが必要であると考える。

0. メディア選択以前から

少なくとも近世以前においては、多くの言語にとって、むしろほとんどの言語にとって、人間が持つ発音器官を用いて音を発する以外に言語メディアは選択の余地がなく、これの使用はほとんど言語の本質とでも言えるほどで、言語そのものに不可欠であった。この言語と音、発音器官の特質と関係は、様々な言語学の研究書に詳しいし、その生物学的側面からの研究も Lenneberg (1967) らによって進められた⁽⁵⁾。

また、文字においても、古代文明の興隆した地域では、程度の差こそあれ、文語と口語の乖離が見られるようだが⁽⁶⁾、藤枝 (1994) の言うように、「書物は本来そうむやみに沢山の人に読ませるものではなかった。」から、現在と比べれば当然メディア選択の幅も狭く、また問題意識とて希薄であっただろう。例えば、枕草子は日常の会話をそのまま文章化している箇所が多く、それらは、当然登場人物の関係や、その人物間での共通認識など、本来話し言葉の特性に沿っており、注釈なしでは読み切れない⁽⁷⁾。おそらく、現在でもこのような書物が書かれれば、ある社会 (当時は宮中の貴族社会) の外の者にとっては極めて難解なものとなろう。つまり、枕草子のそうした部分は、書物として世に問われる限り、現代的な意味ではメディアの選択ミスであるとも考えられよう。

ところが、近世以来、言語をとりまく環境は上述の「自明的メディア」と「特制的メディア」の枠を脱することとなる。これを思想的に裏付けたものは、ヨーロッパでは、結局ルネサンスの活動であると思われる。ルネサンスの活動は知識を求め、それを伝える心を育んだ。そこで、より良く、より広く理解されるために、正しい言語メディアの選択が必要になり、飽くことなくメディアを開発し、そのメディアの特性を分析し、その特性を生かした言語活動が展開されることになる。

1. 新しいメディアが導入される時

BBCのディレクターであった、J. C. W. Reath は1926年に委員会を召集し、アナウンサーが用いる英語の発音について諮問した。その2年後に彼は次のようなコメントを発表している⁽⁸⁾。

Since the earliest days of broadcasting the BBC has recognised a great responsibility towards the problems of spoken English. These are vexed but intriguing. They might have been evaded, leaving both general principles and particular words to chance. Tendencies might have been observed and either reinforced or resisted. As the broadcaster is influential, so also is he open to criticism from every quarter in that he addresses listeners of every degree of education, many of whom are influenced by local vernacular and tradition. There has been no attempt to establish a uniform spoken language, but it seemed desirable to adopt uniformity of principle and uniformity of pronunciation to be observed by Announcers with respect to doubtful words. The policy might be described as that of seeking a common denominator of educated speech.

これは、ラジオ放送が本格化するに当って、使用する発音に基準を設け、範囲を規定することを主旨にしている。つまり、新しい三次的メディア（注(4)参照）の導入により、一次的メディアのあり方を積極的、意識的に規定しようとした例であると言える。実はこれと同じことは、ヨーロッパでは、BBCの様な組織がない段階でも行なわれたことがある。ラジオ以前に、情報伝達の上に起こった革命的出来事、すなわち15世紀後半の印刷技術の導入の時に、それは行なわれた。スペアリングの統一である。それまでは、各写本、各筆者によってばらばらに綴られていた単語に、統一したスペリングが、徐々にではあるが与えられた。Mossé (1958)によると、印刷技術が導入された初期の頃は、まだまだ手稿にかなりの異同が見られ、それを印刷工が統一している。この両者

とも、新しいメディアが導入された目的に沿って、そのメディアにのるべき言語の variety を決定しようとしているのである。このことは、結果として規範的であり、度を過ぎた場合、閉塞的な言語活動を生む危険性はあるが、新しいメディアの導入時にはっきりと認識しなければならないことに思える。

さらにここで、面白いことに、この前者の改革は、後者の改革の延長であることも見て取れる。それは、上記のコメント、また O'Donnell and Todd (1991) らの指摘する中で専ら問題になっているのは pronunciation の問題であって、それ以前の、どんな種類の文を「読む」かは大きな問題にしていない点で指摘しうる。中国文化の強い影響下にあった日本文化の中に生きるものには、その点が欠落しているのではないかとも思える重要な点、つまり、読まれることばは、文(章)語か口語かと言う点である⁽⁹⁾。

2. メディアの双方向性(あるいは interactivity) と話しことば

では、なぜ文(章)語と口語の違いについての指摘が曖昧なままなのであろうか。これは、むしろ曖昧なのではなく、前述のようにわれわれと英語話者(English speakers)との認識の差にある。日本では、今は失われてしまったが、永い漢文学の歴史があり⁽¹⁰⁾、文語の歴史があり、言文一致による現在の文体は、明治以降の作家、学者達のこれも永い努力により完成したものである。それに対し、英語ではすでに近世以降の書物の多くが、「読まれる」ことを重視して「書かれて」いる。その端緒を作ったのが、近代英語、共通語の成立過程に重要な役割を果たした欽定訳聖書(the Authorized Version of the Bible 1611)である。この聖書は、当初から「読んで分かり易い文章」を目指し、約8,000の語彙をもって編纂された。英語では、言わば、新しいメディアにのるべき variety は(彼らには)初めてから決っていたのである。英語におけるこの路線はそれ以後、映画、テレビにまで受け継がれていく。

ところが、ここで気が付くことは、ラジオ、映画、テレビが、実は書物と同

じ性質を持ち合わせている事である。reader が listener となったが、情報の送り手と受け手の間には決定的に双方向性はない。受け手は受け手のままで、送り手の発信する情報を諾として受け取る。そのため、送り手は受け手が分かり易いように情報を整理し、発信することになる¹¹⁾。

それまで扱われた spoken language は、monologue にせよ dialogue にせよ、実際の「話しことば (speech)」とは違った次元の、言わば read language であったと言った方がよからう¹²⁾。それほどに、言語、特に話しことばとメディアの関係にとって、双方向性と言うのは重要な、決め手となるものであり、大きな障壁でもあった。

従って、上述のラジオの導入は Ong (1991) の主張するように orality の復権として画期的なことであるが、言語が本当の意味で orality を復権させるのは、今少し後のことになると思われる。現在のところでは、双方向性を持つメディアとして、電話や無線が挙げられる。電話での会話には intonation などの言語の suprasegmental な要素を盛り込めるし、さらにコミュニケーションをとるために受け手の援助を得ることなどができる。その点では、話しことばに解放されたメディアであると言える。しかし、映像が伴わないために、多くの paralinguistic な要素が欠落するので、例えば、同意を表す語を増やすなど、対面した対話とは違った特徴が現れる。また、普段よりあらたまった style を用いることもしばしば見受けられる。そこで、所謂テレビ電話が普及すれば双方向性はさらに確保されるし、paralinguistic な問題も解決できる。しかし、そこにある概念、あるいは思想は、話しことばにとって理想に近い環境が与えることであり、言語によるコミュニケーション、言語活動に新しい視野を提供するものでもない。

3. 言語活動への新しい視野

文字の発明は、新しいメディアが言語活動に新しい側面、視野を与えた。それは人間の思考にまで影響したとも言われている。それでは果たして、その後のコミュニケーション・メディアの中にはそのような大きなインパクトを持ったものがあつたらうか。前述のように、実際の所は、ラジオ、テープレコーダーなどの出現により話しことばに記録性が付け加わったこと、それによって、より広範囲により多くの聞き手を獲得したこと以外に、文字の出現のような大きな変動をもたらしたものはないと考えられる。

ところが、近年所謂マルチメディアパソコンが目ざましい発展を遂げている。マルチメディア¹³がもたらしてくれるものは、映像・文字・音声の等価の統合である。これは、文字発明の場合ほどではないにしても、今までにはなかった「書きことば」「話しことば」と、さらにそれをのせる所謂メディアの關係に一つの転換をもたらすことは十分に考えられる。なぜならば、話しことば、書きことば、今までは別個とも言える variety であり、それが統合された姿で、等しい価値を持ち提示されることはなかったからだ¹⁴。

4. 新しいメディア教育

現在の極めて初期的なマルチメディアパソコンの世界でも、そこで行われている言語活動が、双方向性を想定したものであることが分かる。例えば、パソコン通信の実態である。パソコン通信は電話回線を通じて行われるという心理的なアナロジーもあろうが、文字に頼りながら、双方向性を意識している。例えば、通信では次のようなメール (e-mail 電子郵便) がやりとりされる。

- 〉 もしよろしければ、入会案内を学校宛に送ります。IDを公開してよ
- 〉 ろしければそちら経由の方が良いかな。

どうもありがとうございます。今、自分の本当に合っている学会とかを探している所なので大変助かります。

上記の文で、>印のついた方は、筆者が既に出したメールをそのまま引用したものである。そして、下2行がそれに対する相手の返事となる。つまり、メールでありながら、あくまでも電話のように、疑似双方向性を出現させている。さらに、これに加えて、suprasegmental, paralinguistic な部分を補おうと、所謂フェイスマークが開発された。例えば、喜びを表すのに、(^_^)，誠意を表すのに、m()mなどがある⁽¹⁵⁾。

このように、マルチメディアパソコンの環境は、従来の書きことば、話しことばの垣根を超え、メディアの特性を生かし、自分のメッセージをより効果的に相手に伝え、また相手からの（概ね迅速な）レスポンスを期待したものとなっている。この点から言っても、マルチメディア時代の教育は、まず狭義、広義のメディアの持つ特性を分析し、そこから得られたものを学習者に提示する必要がある。学習者は、そうしたメディアの特性を考慮に入れて、自分のメッセージあるいは思考を的確に相手に伝えることを目標にしなければならないだろう。その時の、キーワードの一つに interactivity は間違いなく入ることと思われる。

参考文献

- Bolinger, Dwight, and Donald A. Sears. *Aspects of Language*. 3rd. ed. Orlando: Harcourt Brace Jovanovich. 1981.
- Buda, J. K. "The Formatting of Network Messages." *The Cultural Review* 4 (1994) 69-94 Tokyo: School of Commerce, Waseda Univ.
- "Quotations in Network Messages." *The Cultural Review* 6 (1995) 33-58 Tokyo: School of Commerce, Waseda Univ.
- Crystal, David, ed. *The Cambridge Encyclopedia of Language*. 1988. Cambridge: Cambridge Univ. Press. 1989.
- , ed. *The Cambridge Encyclopedia of the English Language*. Cambridge: Cambridge Univ. Press. 1995.
- 電通総研【情報メディア白書 1995年版】東京：電通総研，1995年。
- 藤井貞和【古文の読み方】東京：岩波書店，1984年。

- 藤枝晃『文字の文化史』1991年，東京：岩波書店，1994年。
- Greenberger, Martin. *Technologies for the 21st Century on Multimedia: On Multimedia*. Santa Monica: The Voyager Company, 1990.
- Jung, Udo O.H. "Technology and Language Education in the 21st Century." *AILA Review* 9 (1992) 21-38. Amsterdam: AILA.
- 樺山紘一『比較社会史』東京：放送大学教育振興会，1990年。
- 河野六郎『文字論』東京：三省堂，1994年。
- Lenneberg, Eric. *Biological Foundations of Language*. New York: Wiley, 1967.
- Mossé, Fernand. *Esquisse d'une Histoire de la Langue Anglaise*. Paris: ICM, 1958.
- ニフティ「ネットワークを泳ぐ——フェイスマークの活用術」*On Line Today Japan*. 1995 7: 40-43.
東京：ニフティ。
- O'Donnell, W. R., and Loreto Todd. *Variety in Contemporary English*. 2nd. ed. London: Harper Collins, 1991.
- Ong, Walter J. *Orality and Literacy. The Technologizing of the Word*. 1989. London: Routledge, 1991.
- Ricahrds, Jack, John Platt, and Heidi Weber, eds. *Longman Dictionary of Applied Linguistics*. Essex: Longman, 1985.
- Scovel, Thomas. *A Time to Speak: A Psycholinguistic Inquiry into the Critical Period for Human Speech*. New York: Newbury House, 1988.
- Sweet, Henry. *The History of Language*. Oxford: Oxford Univ. Press, 1900.
- 吉川幸次郎『漢文の話』1986年。東京：筑摩書房，1989年。

ABSTRACT

About 6,000 years ago, human beings invented a marvelous medium for recording their speech: writing. It effected a full-scale cultural revolution and since then has been influencing almost all aspects of culture. It also influenced language itself and resulted in a new variety of language: written language. Today written language is used even for radio and television. That is, it is not the spoken language but the written language being read that is used as there is no possibility of feedback between speaker (sender) and listener (receiver). But multimedia computers, which are beginning to be available now, could bring about a new relationship between language and the communications media thanks to their interactivity. Therefore, we have to teach students how to catch information through such media and how to choose the most appropriate way to express themselves considering the characteristics of each of them.

KEY WORDS: media multimedia computer written language spoken language interactivity

- 注(1) もっとも大まかに言って，langue は言語集団の持つものであり，competence はある言語の理想的な使用者 (ideal speaker / hearer) が持つものである点が違う。しかし，どちらとも実態として把握するには抽象化を要求するものである。
- (2) 言語が人間的意味において，最初に持ったメディアは「音」である。その「音」は，各発音器官が作り出した。発音器官もまた，広義のメディアである。今日では肉体的発音器官に代わり，人工声帯や世界的物理学者 Stephen Hawking が使用して知られるようになったコンピュータに

よる発話機によっても「音」を発する事ができる。

- (3) 例えば、音というメディアによってオノマトペが可能である。また、河野 (1994) は、表音文字である alphabet を用いたヨーロッパの言語の「表語」性を論じている。
- (4) (2)にも示したように、言語活動におけるメディアにも3つのレベルを考える必要がある。
1. 一次的メディア：音、文字がそれにあたる。音が一次的であることに依存はないと思われる。文字についても従前は音の影の様な、二次的 (subordinate) と考えられて来たが、現在は補充しあう別のシステムと考える事が多い。Crystal (1989)
 2. 二次的メディア：発音 (発声) 器官、紙、ペン、印刷、テープレコーダなどがこれにあたる。
 1. を発現させたり、再生させたりするもの。
 3. 三次的メディア：書簡、電話に始まり、所謂マスメディアと呼ばれるメディア、新聞、ラジオ、テレビ、など。二次的メディアで実態化したものをコミュニケーション活動の中に組み入れるもの。

例えば、ある人の考えた事が、発音器官を用いて音を発せられ、ラジオの電波にのせて聴衆に伝えるなどの行為の段階を考えて欲しい。しかし、どの場合にもある程度の単純化は必要である。
- (5) 言語習得の面からは、Scovel (1988) が詳しく論じている。
- (6) 吉川 (1989) は、中国語では、紀元前から文語としての漢文と口語との乖離があったことを指摘している。下って、アラビア語も精緻な文章語を作り、今に伝えている。
- (7) 藤井 (1984) による。
- (8) O'Donnell and Todd (1991) pp. 91-92.
- (9) ここでは、文 (章) 語を、written language (English)、口語を spoken language (English) として考えてみる。もっとも、こうしたことばの定義そのものは色々に、曖昧に使われている。1928年当時、spoken English を、構造主義言語学以後のわれわれと同じレベルで理解していたかははっきりしない。むしろ始めからそれとは意識せずに、後述する read language (English) と考えていた可能性も否定できない。また、近年の Leech and Svartvik (1988) では、Part One で、written English と spoken English を variety として捉えている。Crystal (1995) では、Crystal (1989) に比べむしろ曖昧である。
- (10) 鷗外、漱石を待たず、かつての新聞の漢詩投書欄を見よ。
- (11) 映画やテレビのドラマで交わされる会話が実際の会話よりはるかに分かり易いことは、シナリオそのものや談話分析 (discourse analysis) の成果からも明らかである。なお、Jung (1992) のように、視聴者に対して記録性があるかないかを問題にする場合もある。
- (12) Sweet (1990) は、文字を持たない言語社会での伝承 (口伝) にだけ用いられることばも含め、日常の話しことばではないより格調高いと考えられることばを literary language と言う。
- (13) マルチメディアの概念については、さまざまな仮説が出されているが、重要な点は、①映像・文字・音声の情報を等価値に統合すること ②送り手と受け手が interactive の関係であることが挙げられよう。しかも、それらは、かなりの規模の参加者を前提にしなければならない。従って、現在の段階では、後述する点も含めて、ハード、ソフトの性能、価格など、多くの面で実現には至っていないと考える。OSについても、マイクロソフト社の次期OS、Windows 95 以降が必須となろう。
- (14) 映像はもともと視覚的な記号としては、文字に近い。実際、漢字などは象形文字から発展した文字であるし、印刷技術が導入され文字の大量生産大量消費時代に入った当初から、文字は映像

(その当時は挿絵)と共に書かれた。樺山(1990)

また、マルチメディアの発展が文字情報によるメディアの比重の低下をもたらしていると言う指摘もある(電通総研:1995)。確かに、今は文字情報に多くを頼っているCD-ROMやインターネットのWWW(World Wide Web)なども音声情報の優位を予測させている。が、どれかが全くゼロとなった場合以外は、映像・音声・文字の情報が「等価」であることは、量的なものとは必ずしも一致しない。

- (15) その他、英語の例についてはBuda(1994, 1995)に詳しい。また、日本のフェイスマークについては、通信関係の雑誌に掲載されることも多い。「ネットワークを泳ぐ記号たち——フェイスマークの活用術」参照。